

童話 二二つ

水谷年惠

七四

酔ばらひ猫

猫が金持の狐のうちへ泥棒に這入りました。誰も居ないので、臺所へ行つて、色々な御馳走を澤山食べました。ついでに酒もうんと飲んで、いい心持になつて、出て來ました。足がふらく／＼してちやんと歩くことが出來ません。

道端に一匹の墓がじいつと坐り込んでゐました。酔ばらひ猫は、

「誰かと思つたらげいろか、アツハ、ハ、ハ、ハ。のろ間の、のろ間の大馬鹿げいろだ。さあ除いた、除いた。猫様のお通りだぞ。除かないと踏み潰し

てしまふぞ。」と言つて、眞赤な顔をして、酒くさい息を墓にふうつと吹きかけました。墓は「く／＼。」と笑ひました。

猫はちこつて、

「何ぢや、猫様のお通りを邪魔する氣だな。ようし、見てろ、今踏み潰してやるから。」

と片足をあげて、踏み潰さうとしました。すると、墓は重さうな體を、どたつと一跳はねて、だまつて笑つて居ました。猫はよろよろつとよろけて、

「こいつめ、生意氣なまねしよるな。」

と言つて、も一度片足をあげて、カ一ぱい踏み附けました。踏み附けたと思つたら、墓は一足むか

ふで、すました顔をして、天を眺めて居りました。

「あのれ、このげいろめ、今度こそ踏み潰してやるから、待つてろ、えい、やつ。」

踏み潰さうとした拍子に、墓はどつこいしよと前へ移つて、「此處までおいで。」

よつばらひ猫は、腹が立つて、腹が立つて堪りません。踏み潰してやらうとあせればあせる程、踏みそこなつて、よろけてしまひます。

「此のげいろめ、踏ん付けなきあぢかんど、待つて、こら待つて。」

よつばらひ猫が、片足あげて、踏み付けようとする、墓がどたつと跳ねる、どたつと跳ねるとよつばらひ猫が踏みそこなふ。何遍もく踏みそこなつて、とうく川の縁へ来ました。

「こんだこそ踏み潰すぞ。」

よつばらひ猫が片足あげて、力一ぱい踏み付けた時、「どぶん」と、墓は水の中へ飛び込みました

「あつ。」と言ふ間に、よつばらひ猫も、川の中へ「どぶん」と飛び込んでしまひました。

猿と焼栗

山の中の一軒家の圍爐裏端で、三太郎が焼栗を食べてゐました。小刀で栗の皮に、一寸傷を付けて焼くと、栗は焼けても飛び出しません。三太郎は傷を付けては焼きました。焼けたのをさもうまうに頬ばつて、舌鼓を打つてゐました。

三太郎がうまさうに栗を食べてゐる所を、窓の外から、そつと覗いてゐたものがありました。それは三匹のいたづら猿でした。

猿どもは焼栗が食べたくて堪りませんでした。それで三太郎が柴刈に出かけると、すぐ家の中へ這入つて来て、圍爐裏端にあつた澤山の栗を、一度に火の中へ入れました。皮に傷が附つてありませんから、しばらくすると、栗が皆ふくらんで、

ばちん、ぼん、ぼん、ぼん。

と、素晴らしい音を立てて、四方八方へ跳ね出しました。

三匹の猿は、びつくり仰天、「大變だつ」と一目散に逃げ出してしまいました。

其のあとへ、兎が三匹、遊びに來ました。三太郎の家へ這入つて見ると、誰も居ないで、うまさうな焼栗が、そこら中一面にちらばつてゐます。

三匹の兎は、焼栗を皆拾つて、箆の中へ入れました。

其處へ三太郎が歸つて來ました。

「うさちやん達か、よく來たね。おや栗を焼いて呉れたのかい、どうも有難う。わたしはもうさつき食べたから、お前さん達お上り。」

と言つて、焼栗を一つ残らず呉れました。三匹の兎は喜んで御馳走になりました。

東京市玉姫託兒所の竣工

東京市社會局の市内十一ヶ所の託兒所中、月島、大塚、龍泉寺の三ヶ所は設備の整つた立派な本建築になつてゐるが、今回更に玉姫託兒所が竣工したので今月九日午後一時から落成式を舉げた。同託兒所は鐵筋コンクリート二階建て建築設備費五萬餘圓、紫外光線入りのガラスを用ひた日光浴室の設備は東京市では初めてのものです、この室だけでも三千圓をかけてゐるといふ。また兒童浴場もポイラ二個備へてあつて随時に入浴す出來ると。なほ、市では残りの託兒所を來年二月までには全部本建築とする由。